

## 被共感経験が共感性と向社会的行動に及ぼす影響

小野綾子<sup>1</sup>・田頭穂積<sup>2</sup>

### The Influence of Receiving Empathy on Empathy and Prosocial Behavior

Ayako ONO AND Hozumi TAGASHIRA

キーワード：被共感経験(receiving empathy), 共感性(empathy), 向社会的行動(prosocial behavior)

共感性(empathy)は、「他人の感情を知覚する際に、その他人と共有する感情の状態」といわれている(菊池, 1988)。また, Feshbach(1978)によると共感性は、「他人の感情を知覚する際に、その人と共有する情動的反応である」と定義されている。これらは、他者の直面している状況やその感情を察知し、その他者とは別の存在として同じような気持ちになり、その情動経験を体験するということである。つまり、相手が感じたり考えたりしていることを一個人としてあたかも自分がそうであるかのようにありのままに感じ取れることであると考えられる。簡潔に述べると、菊池(1988)のいう「相手と同じ気持ちになること」であろう。彼は、共感性の持つ側面として、相手の感情の状態を判断できること、相手の行動の予測ができること、相手と同じ感情を体験しそれを共有することの、3つをあげている。そして、このプロセスを経ることによって、他者への共感が起こると考えている。

共感性は利他性の主な動機として考えられており(Mussen & Eisenberg-Berg, 1980)、近年、向社会的行動を動機づける要因、そしてまた、いじめのような攻撃行動を抑制する要因などとして注目されている(桜井, 1986)。向社会的行動(prosocial behavior)とは、Mussen & Eisenberg-Berg(1980)によると、外的な報酬を期待することなしに、他人や他の人びとの集団を助けようとしたり、こうした人びとのためになることをしようとする行為のことであると述べている。つまり、他者との気持ちのつながりを強めたり、それをより望ましいものにしようとする場合にとられる行動のことである(菊池, 1988)。従来、向社会的行動を動機づける要因として共感性、同情(sympathy)、個人的な苦痛(personal distress)、性格特性などが検討されている。しかし、援助が必要であるという向社会的判断ができて、常に行動化するとは限らない。それは他者の情動体験を十分に感じとれていないことに起因すると思われる。また、共感性は、他者理解を深めるとともに、個人間の結びつきを強めたり、対人関係や社会生活を円滑にする役割があり(岩下, 1975)、人間行動の幅広

<sup>1</sup>広島文教女子大学大学院人間科学研究科教育学専攻

<sup>2</sup>広島文教女子大学人間科学部初等教育学科教授

い領域に関与することが推察される(浅川・松岡, 1987)。共感性が希薄化すると、他者の存在の必要性を実感することが困難となり、人間関係がますます脆弱化すると考えられる。共感性は向社会的判断と現実の行動とを結びつける要因として考えられている(菊池, 1988)ことから、向社会的行動に大きな影響を及ぼすと考えられる共感性について再検討する必要があると思われる。

共感性と向社会的行動の関連性を検討した Mehrabian & Epstein (1972) は、共感性得点の高い人は低い人よりも援助行動が多く、攻撃行動は少ないことを明らかにした。これは、援助行動の生起には共感性が深く関わり、共感性の高低が援助行動を促進・抑制するといえるだろう。さらに、松井(1981)も、共感性の高い者ほど援助経験も多く、感情的に他者からの影響を受けやすいということを示している。また、彼の研究において、共感性→規範意識→援助行動 という援助行動の生起機序モデルが明らかにされている。つまり、共感性と援助行動は、規範意識を媒介にして成立するというモデルである。また、鈴木(1992)も、共感性を向社会的行動の規定因とみなし、共感性と共に、外向性もその一つであることを明らかにしている。そして、共感性や外向性が向社会的行動を直接的に規定するのではなく、媒介変数として社会的スキルが存在し、それが向社会的行動を促進、抑制するという因果モデルを提示している(共感性・外向性→社会的スキル→援助行動)。

上述したように、先行研究では、向社会的行動を喚起する要因として共感性に着目し、向社会的行動の生起過程が数多く検討されている。中には、共感性と向社会的行動を媒介するものとして規範意識、社会的スキル、外向性などの要因を明らかにしたものがある(松井, 1981; 鈴木, 1992)。菊池(1983)も状況変数と行動特性との関連から向社会的行動モデルを構築している。これらは、共感性と向社会的行動の関係に焦点をあて、様々な媒介変数について検討したものである。しかし、これまでの研究では、共感性に影響を及ぼす先行変数には注意が払われずにモデルの構築が行われてきた。共感性に影響を及ぼす先行変数が存在するのか、存在するとすればそれが共感性に影響を及ぼし、向社会的行動が生起されるという、従来の因果モデルが精緻化されることになる。

Feshbach(1978)によると、共感性の持つ側面として情動的な反応性の要素があり、それは、「相手と同じ情動を共有することができるようなやり方で、現に自分のみている否定的・肯定的な情動を経験すること」であると述べている。ところが、このように他者の感じている情動をそのままに共有することは容易ではないと思われる。しかしながら、他者から共感された経験があると、その他者の気持ちや状況を敏感に感じとることができ、それらをより察知しやすくなるのではないかと考えられる。これは、他者から共感されることにより、自己の共感性が喚起されやすくなることを仮定している。つまり、共感性を高める先行変数として、他者から共感された経験(以後、被共感経験と呼ぶ)が重要な要因になるのではないかと推察できる。ところが、被共感経験が共感性、向社会的行動に影響を及ぼしているという過程を検証した先行研究はみられない。そこで本研究では、被共感経験が個人の共感性を喚起し、向社会的行動を生起するという仮説モデル、即ち 被共感経験→共感性→向社会的行動 について検討し、被共感経験が共感性と向社会的行動に及ぼす影響過程について明らかにしていくことを目的とする。

## 方 法

**対 象 者** A女子大学2年生86名を対象とした。

**調査時期** 2004年11月に実施した。

**調査用紙** 3つの尺度からなる調査用紙を作成した。

- ①被共感経験尺度 角田(1994)によって開発された共感経験尺度改訂版(EESR)を修正して用いた。角田(1994)の共感経験尺度改訂版(EESR)は、過去の経験に基づいて個人の共感性のタイプを評価するための尺度として、「共有経験」と「共有不全経験」の2つの下位尺度から成る。本研究では、「共有経験」の下位尺度10項目を抽出し、全項目の記述を「～したことがある」から「～してもらったことがある」に修正し、被共感経験尺度として用いた。
- ②共感性尺度 他者の情動や感情に対する共感性を測定するために、加藤・高木(1980)によって開発された情動的共感性尺度を用いた。これは、Mehrabian & Epstein(1972)によって開発されたものを、加藤・高木(1980)が日本人の生活感情や生活条件にふさわしい内容に修正・変更したものであり33項目からなる。なお、加藤・高木(1980)は7件法を用いているが、本研究では5件法に修正して用いた。
- ③向社会的行動尺度 向社会的行動尺度(大学生版)20項目を一部修正して用いた。これは、Rushton(1981)の愛他行動尺度を参考にして、菊池(1988)が独自に作成したものである。思いやり尺度とも呼ばれており、生命の危機にさらされるような行動や緊急場面は含まれておらず、小さな親切行動が主な内容となっている。

## 手 続 き

項目の提示順序のカウンターバランスをとるために、調査用紙を2タイプ作成し、対象者にランダムに配付した。その後、回答方法を説明し、無記名で集団実施した。

## 結果及び考察

### 1. 尺度の因子構造

各尺度の因子構造を明らかにするために尺度別に因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行った。固有値 1.0以上で、因子負荷量 .40以上の項目を採用した。その結果、被共感経験尺度においては、苦しみや悲しみを共感してもらったことがあるという「ネガティブ感情(V1)」因子、びっくりした気持ちや恐ろしさを共感してもらったことがあるという「驚愕感情(V2)」因子、わくわくした気持ちや楽しい気分を共感してもらったことがあるという「ポジティブ感情(V3)」因子の3因子が抽出された(Table 1)。共感性尺度においては、他者の感情を共有しようとしなない「感情的冷淡さ(V4)」因子、他者の感情に関与してしまう「感情的関与(V5)」因子、他者の気分や雰囲気を感じとり、その影響の受けやすさを示す「感情的被影響性(V6)」因子、他者へ温かい感情を抱く「感情的温かさ(V7)」因子の4因子を抽出した(Table 2)。向社会的行動尺度においては、社会において取ることが望ましいとされる「社会的援助(V8)」因子、知らない人に援助を行う「見知らぬ他者への援助(V9)」因子、友人などに友好的な援助を行う「友好的援助(V10)」因子、反射

Table 1 被共感経験尺度の因子分析結果

項 目	因 子			共通性
	F 1	F 2	F 3	
<b>F1 ネガティブ感情</b>				
3 自分が何かに苦しんでいるとき、他の人にその気持ちを感じとってもらったことがある	.829	.204	.228	.461
2 自分が悲しんでいるとき、他の人に自分の気持ちを感じともらい、その悲しさを共有してもらったことがある	.771	.198	.227	.685
4 自分が不快な気分にいるとき、他の人にその内容を話してその気持ちを共有してもらったことがある	.695	.141	.442	.781
1 自分が腹を立てているとき、他の人にその怒りを共有してもらったことがある	.610	.270	.125	.698
<b>F2 驚愕感情</b>				
9 自分が「こんなことがあって、とてもびっくりした」と話したとき、他の人にその気持ちを感じとってもらったことがある	.251	.785	.255	.331
6 自分があることに驚いたと語ったとき、そのときの驚きを他の人に感じとってもらったことがある	.164	.777	.418	.805
5 自分が何かを恐がっているときに、他の人にその恐ろしさを共有してもらったことがある	.384	.428	.012	.650
<b>F3 ポジティブ感情</b>				
8 自分が楽しい気分になっているときに、他の人にその楽しさを感じてもらったことがある	.280	.237	.831	.825
7 自分が何かを期待しているときに、そのわくわくした気持ちを他の人に感じとってもらったことがある	.270	.458	.606	.745
寄与率	50.38	10.34	5.72	
累積寄与率	50.38	60.73	66.45	

Table 2 共感性尺度の因子分析結果

項 目	因 子				共通性
	F 1	F 2	F 3	F 4	
<b>F1 感情的冷淡さ</b>					
20 小さい子どもはよく泣くがかわいい	.742	.067	-.179	-.008	.587
19 私は他人が何かのことで笑っていても、それに興味をそそられない	.682	.284	-.205	.017	.598
23 私は人が冷遇されているのを見ると非常に腹が立つ	.609	.105	-.125	.004	.398
14 私はまわりの人が悩んでも平気でいられる	.597	.134	.020	-.206	.417
22 私は不幸な人が同情を求めているのを見るといやな気分になる	.502	.188	-.366	-.152	.445
<b>F2 感情的関与</b>					
7 私は映画を見ていて、周りの人の泣き声やすすり上げる声を聞くと、おかしくなることがある	.079	.781	-.125	.055	.634
1 私は映画を見るときつい熱中してしまう	.295	.667	-.009	-.265	.603
6 私は友人が悩みごとを話し始めると、話をそらしたくなる	.077	.645	-.101	-.048	.435
4 私は他人の感情に左右されずに決断することができる *	-.182	-.608	-.022	.109	.415
<b>F3 感情的被影響性</b>					
15 歌を歌ったり、聞いたりすると私は楽しくなる	-.024	-.161	.729	.033	.558
10 私は人がどうしてそんなに動揺することあるのか理解できない	-.194	.087	.670	.059	.498
11 私は感情的に周りの人から影響を受けやすい	-.262	-.091	.550	.168	.408
<b>F4 感情的温かさ</b>					
18 私は動物が苦しんでいるのを見るととてもかわいそうになる	-.069	.000	.007	.663	.444
24 私は友人が動揺していても自分まで動揺してしまうことはない *	-.009	-.010	.004	-.496	.246
17 私は人がうれしくて泣くのを見ると、しらけた気持ちになる	.014	-.123	.142	.485	.271
3 私は愛の歌や詩に深く感動しやすい	-.227	-.373	.071	.477	.423
21 私は贈り物をした相手の人が喜ぶ様子を見るのが好きだ	-.179	-.100	.306	.421	.313
寄与率	23.96	8.52	7.13	5.59	
累積寄与率	23.96	32.48	39.61	45.21	

\*は逆転項目

Table 3 向社会的行動尺度の因子分析結果

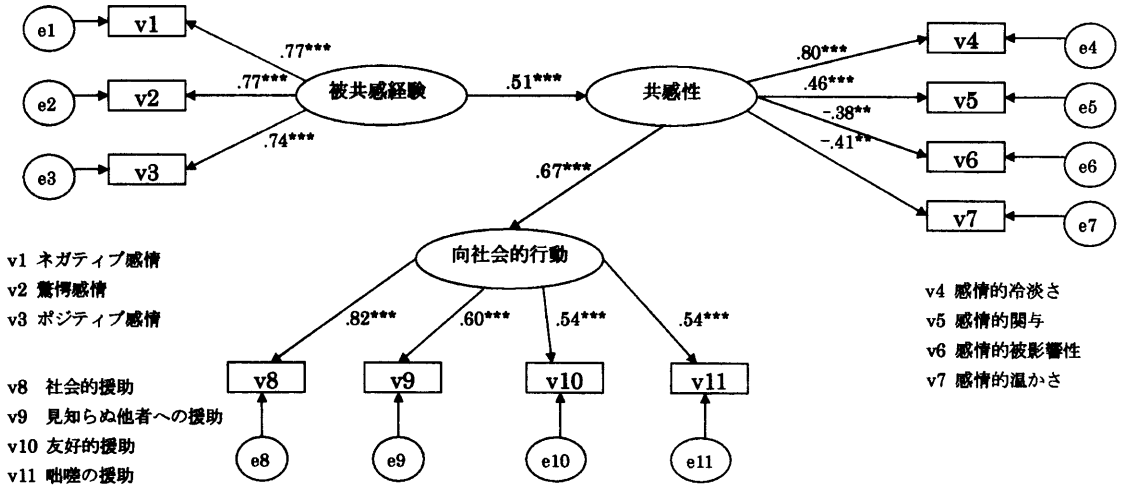
項 目	因 子				共通性
	F 1	F 2	F 3	F 4	
<b>F1 社会的援助</b>					
2 渡されたおつりが多かったとき、注意してあげる	.623	.133	.095	.060	.418
20 自動販売機や切符販売機などの使い方を教えてあげる	.561	.212	.176	.284	.427
1 列にならんでいて、急ぐ人のために席をゆずる	.550	.002	.159	.177	.359
9 何か探している人にはこちらから声をかける	.527	.158	.244	-.009	.362
3 ころんだ人を起こしてやる	.525	-.121	.099	.335	.398
12 雨降りのとき、あまり親しくない友人でもカサに入れてやる	.517	.185	.260	.185	.403
7 列車などで相席になった人の話し相手になる	.458	.173	.259	-.098	.316
19 ケガ人や急病人が出たとき、介抱したり救急車を呼んだりする	.434	.261	.174	.186	.321
11 酒に酔った友人などの世話をする	.414	.379	.246	-.067	.380
<b>F2 見知らぬ他者への援助</b>					
16 知らない人に頼まれて、カメラのシャッターを押してやる	.224	.786	-.022	.246	.729
15 見知らぬ人がハンカチを落としたとき、教えてあげる	.097	.695	.246	.173	.583
<b>F3 友好的援助</b>					
6 友人のレポート作成や宿題を手伝う	.110	.039	.614	.053	.393
4 あまり親しくない友人にもノートを貸す	.308	.053	.559	.091	.418
17 バスや列車で荷物を網棚にのせてあげる	.301	.174	.481	.048	.354
<b>F4 咄嗟の援助</b>					
5 気持ちの悪くなった友人を保健室などに連れて行く	.244	.237	.409	.602	.645
18 知らない人が落として散らばった荷物を、いっしょに集めてあげる	.088	.310	-.050	.451	.310
寄与率	29.21	6.56	3.96	3.17	
累積寄与率	29.21	35.77	39.72	42.89	

的に援助の手を差し伸べる「咄嗟の援助(V11)」の4因子解が得られた(Table3)。

## 2. 仮説モデルについて

被共感経験が共感性に影響を及ぼし、そこから向社会的行動が生起するという仮説モデルを立て、Amos5.0により、各尺度の下位尺度得点の平均を観測変数とする共分散構造分析を行なった。このモデルは、11(V1~V11)の観測変数、3つの潜在変数(被共感経験、共感性、向社会的行動)によってパスを構成した。適合度指標は、GFI=.888、AGFI=.832、CFI=.943、RMSEA=.057であったことからモデルのあてはまりは悪くないと思われる。

Figure 1より、被共感経験から共感性へのパスは .51( $p<.001$ )で有意であり、被共感経験が高いと、共感性も高くなるという正の関係が示された。また、共感性から向社会的行動へのパスも .67( $p<.001$ )で有意となり、共感性が高くなると向社会的行動も生起しやすいという正の関係が得ら



注1) 数値は標準偏回帰係数を示す。  
 注2) + p<.1, \* p<.05, \*\* p<.01, \*\*\* p<.001

Figure 1 被共感経験・共感性・向社会的行動の因果モデル

れた。これは、被共感経験により共感性は影響を受け、そこから向社会的行動が生起するという本研究の仮説モデルを支持する結果を示している。

さらに、共感性を介さない向社会的行動は生起しないということを検証するために、被共感経験から直接的に向社会的行動が生起するというパスを立て、同様の分析を行った。その結果、被共感経験→向社会的行動のパス係数は .17で有意ではなかった。つまり、被共感経験からは直接的に向社会的行動は生起せず、共感性が向社会的行動を動機づける要因になっていることが示された。これは、共感性によって向社会的行動が規定されるという先行研究とも一致する結果である (Mehrabian & Epstein, 1972; 鈴木, 1992; 松井, 1981)。

### 3. 被共感経験(ネガティブ・驚愕・ポジティブ感情)と共感性・向社会的行動の関係

被共感経験の「ネガティブ感情」、「驚愕感情」、「ポジティブ感情」が共感性・向社会的行動へ及ぼす影響の違いをみるために、被共感経験の各感情を単独に投入した共分散構造分析を行った。その結果、被共感経験→共感性→向社会的行動 のパス係数は、「ネガティブ感情」の場合はそれぞれ、.46 (p<.001), .63 (p<.01), 「驚愕感情」の場合はそれぞれ、.48 (p<.001), .69 (p<.001), 「ポジティブ感情」の場合はそれぞれ、.22 (p<.1), .67 (p<.01) という値を示した。「ネガティブ感情」、「驚愕感情」単独では、被共感経験の3つの感情を投入したときの共感性へのパス係数とほとんど差がみられないことから、共感性へ与える影響も3つの感情を投入したときとほぼ同様であると思われる。一方、「ポジティブ感情」だけを投入した場合は、3つの被共感経験を投入したときの値よりも、被共感経験→共感性 のパス係数が、.22と低い値を示した。このことから、楽しい

気分やわくわくした気持ちなどのポジティブな感情を他者から共感してもらった経験は、単独ではほとんど共感性に影響を与えないということが推測できる。しかし、3つの被共感経験の感情を同時に投入したとき、「ポジティブ感情」のパス係数は、.74と高い値を示している。これは、他の「ネガティブ感情」、「驚愕感情」と同様の値である。このことより、「ポジティブ感情」だけの被共感経験では共感性にはほとんど影響を与えないが、ネガティブ感情や驚愕感情を伴うことにより、共感性に及ぼす影響が高まることが推察できる。つまり、ネガティブ感情や驚愕感情の被共感経験を伴わなければ、ポジティブ感情が共感性に及ぼす影響は高まらないといえよう。苦しい気持ちや悲しい気持ち、驚いた気持ちを他者に共感してもらうことを経験することによって、楽しい気持ちやわくわくした気持ちを共感してもらった経験がさらに効果的に共感性を高めることにつながっていくと思われる。また、ネガティブ感情も驚愕感情もそれぞれ単独の場合よりも3つの感情を同時に投入したときの方が高い値を示していることから、3種の感情が共感性へ相互に影響しているといえるであろう。

さらに、被共感経験の2つの組み合わせが共感性にどのような影響を及ぼし、向社会的行動を動機づけるかについて詳細に検討するために、「ネガティブ感情・驚愕感情」、「ネガティブ感情・ポジティブ感情」、「驚愕感情・ポジティブ感情」の被共感経験をそれぞれ投入して同様の分析を行った。その結果、被共感経験→共感性→向社会的行動のパス係数はそれぞれ、「ネガティブ感情・驚愕感情」の場合は、.62 ( $p < .001$ )、.67 ( $p < .001$ )、「ネガティブ感情・ポジティブ感情」の場合は、.36 (n.s.)、.65 ( $p < .01$ )、「驚愕感情・ポジティブ感情」の場合は、.42 ( $p < .05$ )、.69 ( $p < .001$ )という値を示した。ポジティブ感情を伴う2つの被共感経験の場合には、ポジティブ感情が含まれない「ネガティブ感情・驚愕感情」の場合に比べて被共感経験→共感性のパス係数が低くなる。

以上のことから、ポジティブ感情の被共感経験単独だけでは高まらなかった共感性も、他の2種の被共感経験が存在することによってさらに喚起されることが認められた。つまり、「ネガティブ」・「驚愕」・「ポジティブ」の多様な被共感経験をすることが、共感性を高めるために必要であるということが明確化されたといえるであろう。また、2種の被共感経験の組み合わせでは、「ネガティブ感情・驚愕感情」が共感性への最も高いパス係数を示したことから、「ネガティブ感情」と「驚愕感情」は、共感性に大きな影響を及ぼす被共感経験であるといえよう。

本研究では、共感性を高める要因として、他者から共感される経験の重要性が指摘されたが、今後の課題としては、他者に共感したことがあるという「共感経験」が共感性に及ぼす影響、ならびに共感性と被共感経験との関連など、被共感経験と共感性の両面から研究を進めていく必要があろう。また、共感性の情動的成分だけでなく、認知的成分も含めた、共感性の多次元の検討も必要であろう。さらに、本研究の仮説モデルにおいては、共感性から向社会的行動へのパス係数が高い値を示しているけれども、先行研究で明らかにされている媒介変数(規範意識、社会的スキル、外向性など)の影響過程についても検討の余地が残されている。



文献

- 浅川 潔・松岡砂織 1987 児童期の共感性に関する発達の研究 教育心理学研究, **35**, 231-240.
- 出口保行・斉藤耕二 1991 共感性の発達研究 東京学芸大学紀要, **42**, 119-134.
- Feshbach, N. D. 1978 Studies of empathic behavior in children. In B. A. Maher (Ed.), *Progress in experimental personality research*, Vol.8, New York : Academic Press. Pp.1-47.
- 岩下豊彦 1975 共感の社会心理 春木 豊・岩下豊彦(編著) 共感の心理学 川島書房
- 角田 豊 1994 共感経験尺度改訂版(EESR)の作成と共感性の類型化の試み 教育心理学研究, **42**, 193-200.
- 加藤隆勝・高木秀明 1986 青年期における情動的共感性の特質 筑波大学心理学研究, **2**, 33-34.
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する-向社会的行動の心理とスキル- 川島書房
- 松井 豊 1981 援助行動の構造分析 心理学研究, **52**, 226-232.
- Mehrabian, A., & Epstein, N. 1980 A measure of emotional empathy. *Journal of Personality*, **40**, 525-543.
- マッセン P., & アイゼンバーグ N. 菊池章夫・二宮克美(訳) 1980 思いやり行動の発達心理 金子書房
- (Mussen, P., & Eisenberg, N. 1977 Caring, sharing, and helping : *The roots of prosocial behavior in children*. San Francisco : Freeman.)
- 桜井茂雄 1986 児童における共感と向社会的行動の関係 教育心理学研究, **34**, 342-346.
- 鈴木隆子 1992 向社会的行動に影響する諸要因 -共感性・社会的スキル・外向性- 実験社会心理学研究, **32**, 71-84.